

## 指定

### 【 1 】

- 1 種 別 重要文化財（彫刻）
- 2 名称及び員数 金銅造池田光政坐像 1 軀
- 3 所 在 地 備前市閑谷
- 4 所 有 者 （宗）閑谷神社
- 5 製作年代 宝永元（1704）年
- 6 寸 法 像高60.2cm、頭頂高51.3cm、膝張38.6cm
- 7 説 明

金銅造池田光政坐像は現在閑谷神社に祀られている。閑谷神社は、もとは芳烈祠<sup>ほうれつし</sup>と呼ばれ、貞享3（1686）年、初代岡山藩主池田光政（1609から1682年）を祀るために建てられた。『芳烈祠堂記』によれば、本像は津田永忠の依頼によって宝永元（1704）年に完成、宝永4（1707）年津田の死後に2代岡山藩主池田綱政の了解のもとに芳烈祠に納められたという。『備陽国学記録』の記述から、京仏師播磨と八郎兵衛が製作にあたったと考えられている。

束帯姿で坐し、頭頂には冠を被り、冠背面に差し込まれた<sup>えい</sup>纓は湾曲しながら垂下する。右手に笏を執り、左手は腰に携えた飾太刀に添える。背中に<sup>したかさね</sup>下襲の裾があり、二度折り曲げられている。袍<sup>ほう</sup>には<sup>わなしからくさもんよう</sup>輪無唐草文様と花菱文様の花卉が鑿彫りにより表現してある。飾太刀の柄と鞆<sup>さや</sup>、腰の<sup>せきたい</sup>石帯、腹前から前方に垂下する<sup>ひらお</sup>平緒には、光政が藩主時代に用いられていた池田家の家紋である<sup>とまりちょうもん</sup>泊蝶文と光政使用の整容具にも用いられている<sup>てっせんかもん</sup>六弁の鉄線花文が表されている。太刀柄の<sup>な な こ</sup>鮫皮部は魚々子を1つずつ丁寧<sup>めんぼう</sup>に打刻している。面貌は、眉毛は毛彫りされ太く弧を描き、両目を細めて目尻を下げ、口角を上げて微笑する。両耳は大きく、特に<sup>じだ</sup>耳朶は厚く造る。

体部は一鑄で、冠を含めた頭部は別鑄とし首下端で体部に接合する。冠と光政の<sup>あご</sup>顎を結ぶ紐や両手首から先は別鑄である。太刀は上部と下部を別鑄し、左脇下部に別々に差し込み固定する。笏は別鑄とし、右手第1指と第2指の間にはめ込む。

鑄上がった金銅に純度の高い<sup>あかきん</sup>赤金で<sup>と きん</sup>鍍金を施し、その後<sup>たがね</sup>に鑿で頭髪や眉毛、束帯の文様等を刻む。彫刻としての完成度は高く、近世における高い技術水準を示している。光政の生前、または没後すぐに製作された肖像等は残されておらず、本像が現存する最古のもので、歴史的資料としての価値も高い。

### 【 2 】

- 1 種 別 重要文化財（彫刻）
- 2 名称及び員数 木造菩薩坐像 1 軀
- 3 所 在 地 岡山市北区後楽園 岡山県立博物館保管

- 4 所有者 (宗) 鹿忍神社  
 5 製作年代 10世紀前半  
 6 寸法 像高39.8cm、膝張26.9cm  
 7 説明

木造菩薩坐像は、瀬戸内市牛窓町鹿忍<sup>かしの</sup>の鹿忍神社に祀られる。鹿忍神社は、縁起等の資料が伝世していないため創建年代や社名等は不明である。江戸時代終わりまでは五社大明神と称されており、現在の社名は明治時代以降のものである。

本像は、広葉樹による一木彫成で、内刳<sup>うちぐり</sup>はない。右足を外に結跏趺坐<sup>けっかふざ</sup>し、左腕は曲げて腹前でやや上げる。天冠台は列弁<sup>てんかんだい</sup>を1条の紐で束ねた表現をとる。前髪は左右それぞれ2房を表し、耳後ろに1条の垂髪を表現する。頬は豊かに張り、上瞼のラインが直線的で伏目となる。三道は立体感のある刻線である。着衣は、条帛<sup>じょうはく</sup>を左肩から右脇を通し、さらに左肩にかけて左胸前に廻す。細部<sup>ひだ</sup>の贅を省略させた簡素な表現で、完全な一木彫成を目指す等、本像は神道における本地仏として製作されたと考えられている。

右半身の欠損は著しいものの、左半身は比較的残存しており、神像形式として彫成されていることから、全身像をおおむね復元することができる。10世紀前半より遡ると考えられ、一木彫成である神仏習合像の全体像が復元できる平安時代の事例で、県内最古の神仏習合像として重要である。

【 3 】

- 1 種別 重要文化財（工芸品）  
 2 名称及び員数 太刀 銘 備中国万寿庄住左兵衛尉恒次 元徳二年十月日 1口  
 附 黒漆塗鞘打刀拵 1口  
 延宝八年本阿弥光常折紙 1通  
 3 所在地 岡山市北区丸の内 (一財) 林原美術館保管  
 4 所有者 (株) 林原  
 5 作者 恒次  
 6 製作年代 元徳2(1330)年  
 7 寸法 刃長 73.2cm、反り 2.6cm  
 8 銘文 (表) 備中国万寿庄住左兵衛尉恒次  
 (裏) 元徳二年十月日  
 9 説明

左兵衛尉恒次は、青江派<sup>さひょうえのじょうつねつぐ</sup>の刀工である。青江派は備中国子位庄<sup>こいのしょう</sup>の青江及び万寿庄<sup>ますのしょう</sup>(現岡山県倉敷市)で活動した刀工の流派で、平安時代末に始まり鎌倉時代から南北朝時代にかけて栄えた。『古今銘尽』によると青江派には2系統があり、恒次は平安時代末期の安次の流れをくむ。同工の作には、他に同じ銘文では延慶と元徳の年号作もある。

しのぎづくり いおりむね

なかきつきき

鎬造、庵棟で、腰反り高く踏ん張りがあり中鋒である。地鉄は小板目よくつみ縮緬状になり、澄肌あらわれ、鎬寄りに乱れ映り立つ。刃文は中直刃に小沸つき、わずかに小足逆がかって入る。茎は生ぶで、浅く刃上がり栗尻、目釘孔は1つである。銘文には居住地、官職名、年紀が入る。

白鞘には「備中国万寿庄恒次 長サ貳尺四寸壹分有之 代金子百枚」という墨書がある。また、「恒次 春二六」の蔵番の朱書もあり、刀袋にも「春二六号」の札がある。これらは仙台藩における刀剣の目録表記と一致するもので、本作が仙台藩主伊達家に伝来したことを具体的に示すものである。さらに、12代本阿弥光常による延宝8（1680）年7月3日、代金子五枚の折紙が付く等、資料的価値も高い。外装は黒漆塗鞘で、葵紋が付されている。

縮緬肌を示し、澄肌があらわれる等、青江派の特徴を十分に備える作品で、居住地、官職名、年紀が入り、岡山県の刀剣史上、重要な作品である。

#### 【 4 】

- 1 種 別 重要文化財（考古資料）
- 2 名称及び員数 袈裟襷文銅鐸（神明遺跡出土） 1口
- 3 所在地 岡山市北区西花尻 岡山県古代吉備文化財センター
- 4 所有者 岡山県
- 5 製作年代 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀）
- 6 寸法及び重量 高さ31.6cm、身部高23.6cm、身部下半部長径16.5cm、同短径11.2cm、重さ1925g
- 7 説 明

銅鐸は、拠点的な集落遺跡である神明遺跡で出土している。同遺跡は、総社平野中央北部の沖積平野に立地し、弥生時代中期後葉から中世にかけて断続的に営まれた。

本銅鐸は高さ31.6センチメートル、重さ1925グラムで、一部欠損しているものの、全体像が把握できる資料である。銅鐸は形態的な特徴から菱環鈕式、外縁付鈕式、扁平鈕式、突線鈕式と変遷することが明らかにされており、本銅鐸は扁平鈕式古段階に相当し、県内出土例でも比較的古い段階に属する。身部の鰭近くに斜格子文が確認され4つの方形区画の文様が認識されることから、四区袈裟襷文銅鐸と判断できる。鈕には流水文が施されているが、このような特徴を持つ銅鐸は全国で3点が確認されるに留まり、製作集団を考えるうえで非常に重要である。身部内面下部には内面突帯が巡る。内面突帯の上面は使用により摩滅していることから、内部に舌を吊り下げて、鳴らす使用方法が窺え、さらに摩滅具合から長期に及ぶ使用が推測される。銅鐸は「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」に使用のあり方が変化すると明らかになっているが、本銅鐸のこうした内面突帯の特徴から「聞く銅鐸」と位置付けることができると同時に、その実態を明らかにする点でも注目さ

れる。

本銅鐸は土坑に鱗を立てた状態で出土しており、埋納状況が発掘調査で把握できた点も重要である。岡山県内において発掘調査で埋納状況が把握できた事例としては、岡山市高塚遺跡から出土した突線流水文銅鐸(国指定重要文化財(考古資料))に次いで2例目で、貴重である。

## 【 5 】

- |   |        |                      |
|---|--------|----------------------|
| 1 | 種 別    | 重要文化財(考古資料)          |
| 2 | 名称及び員数 | 久米廃寺出土塑像仏及び埴仏 50点    |
| 3 | 所在地    | 津山市中北下 久米歴史民俗資料館・民具館 |
| 4 | 所有者    | 津山市                  |
| 5 | 製作年代   | 7世紀                  |
| 6 | 説明     |                      |

津山市久米廃寺は、吉井川の左岸の丘陵南裾に立地する飛鳥時代から平安時代前期にかけての寺院跡である。塔を中心に東に金堂、西に講堂が近接し、それらを回廊で取り囲む伽藍配置が確認されている。寺域は東西約130メートル、南北約110メートルである。複数棟の寺院建造物跡が検出された地方寺院跡として学術的価値が高く、昭和52(1977)年4月8日に県指定史跡に指定されている。

出土遺物には多量の瓦片や土器片に加え青銅製相輪そうりんや石帯せきたい等があり、その中に塑像仏の破片と埴仏が含まれている。出土地点は塔及び金堂周辺であるが、特に塔の周囲からは焼土、壁土が混在して出土しており、一括廃棄の可能性が高い。

塑像仏は小片であるが、様々な部位が確認されている。如来像としては螺髪らほつが確認され、その大きさから丈六仏じょうろくぶつと推測されている。また、頭髮部分や顔面ひせん、臂釧も、指先く、裳きょうこうや裙だいざかえりといった衣装、胸甲、台座反花が見られ、複数軀の像が存在したことを示す。頭髪の様相から菩薩像の存在が、胸甲から天部像の存在が確認される。いずれも被熱しているものの、顔面や衣装は表面を仕上げ土で滑らかに整形し、丁寧に造作されたことが窺える。

埴仏は火頭形で、独尊形式の如来坐像を表現したものと三尊仏を表現したものがある。2点出土した独尊形式の如来坐像の埴仏は同範と考えられ、顔面に金箔が認められるものがある。

塑像仏の出土事例は県内でも限られ、特に菩薩像や天部像は本遺跡での確認に留まり希少価値が高い。また、複数種類の塑像仏の存在は堂内荘厳をよく示し、7世紀における地方寺院の信仰形態を考える上で重要であると同時に、造形の素晴らしさは中央との繋がりも示唆し、学術研究上で貴重である。

【 6 】

- 1 種 別 重要文化財（歴史資料）
- 2 名称及び員数 紙本著色坤輿万国全図屏風 6 曲 1 隻
- 3 所在地 岡山市北区丸の内
- 4 所有者 （一財）林原美術館
- 5 製作年代 江戸時代中期
- 6 寸法 縦 1 6 4 . 8 cm、横 3 7 6 . 0 cm
- 7 説 明

『坤輿万国全図』は明末の 1 6 0 2 年にイタリア人宣教師マテオ・リッチが李之藻の協力を得て原図を作成し、北京で刊行された世界地図である。林原美術館本はその日本製模写の 1 つであり、間似合紙を各扇 5 段貼りにして 6 曲 1 隻の屏風に仕立てて描画したものである。地域ごとに色分けし、海は藍、山岳は群青や緑青を用いて彩色され、経緯線は胡粉を用いて太く引かれている。注記等の文字は墨や金泥を用いている。表背には江戸時代中期以降に一般的に見られる雀紙を使用しており、当初の原装のままで改装されていない可能性が高い。

一扇裏上部には「準備 屏第一號 半双」と記され「参考品」の朱印が捺された岡山藩主池田家の整理札や「四拾年四月調」、「半双 屏第貳拾六號」、朱書で「十九番」と記された貼札が合計 4 枚確認できる。箱蓋上にも池田家の整理札の裏側を用いた「才十一號地球圖 六曲半双」の貼札等がある。

また、『御後園諸事留帳』の明和 8（1 7 7 1）年 1 1 月 2 6 日の項に 5 代岡山藩主池田治政が、隠居中の 3 代藩主継政と共に御後園（現在の岡山後樂園）で相撲を見た記録があり、その中で「世界之絵之御屏風ニ而囲ひ」とあるのが本屏風と推考される。

『坤輿万国全図』の刊本は日本に 3 点あり、日本製模写本は 2 1 点現存し、その多くは旧大名家に伝来した。日本製模写本は大きく東日本型と西日本型に類別され、西日本型の本作は日本地名の改訂がないという特徴を持つ。類例として、神戸市立博物館所蔵（神戸市博本）がある。神戸市博本はガラパゴス諸島や日本北方に金島・銀島を描く等、1 6 0 2 年刊本には認められない表現があり、台湾の呼称である「東寧」（1 6 6 2 年成立）が記されていることから、製作は 1 7 世紀中頃を遡ることはないとされている。本作も同様の特徴が見られることから、製作年代を考える上で参考になる。ただし、神戸市博本にあるイエズス会の印章が書かれていない等、異なる点もある。

本作は岡山藩主池田家の伝来品で、色鮮やかな彩色に金泥を用いた文字等、意匠的にも優れている。世界的にも希少な地図の模写本で、東西文化交渉史や地理学史の研究上、貴重である。

【 7 】

- 1 種 別 天然記念物（植物）
- 2 名称及び員数 コヤスノキ 1株
- 3 所在地 美作市土居
- 4 所有者 （宗）土居神社
- 5 品 種 トベラ科
- 6 大 き さ 樹高約6.7m、枝張り約8.5m
- 7 説 明

コヤスノキ (*Pittosporum illicioides Makino*) はトベラ科の常緑低木である。葉は長楕円形で先が尖り、基部はくさび形に細まる。5月に黄色の五弁花をつける。果実は直径1センチメートル余りで3つに裂開し、内部に粘液に包まれた赤色の種子が現れる。

コヤスノキは、若木では単幹であることが多い。土居神社境内にある本樹は17本にも及ぶ多幹で最大の幹は根回り43センチメートルである。樹高約6.7メートル、枝張りは約8.5メートルと県内において最も大きく、樹勢、枝の伸長は良好な生育を示す。

日本国内における分布は岡山県中・東部と兵庫県西部に限られ、県内における確認生育地点数も限られている。中国と台湾にも分布し、植物分布学上貴重な種である。環境省の準絶滅危惧、岡山県の絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。

【 8 】

- 1 種 別 重要無形文化財
- 2 名 称 手漉和紙（三極紙）
- 3 保持者の氏名 上田繁男
- 4 保持者の生年月日、年齢、住所  
昭和17年6月1日、77歳、津山市上横野
- 5 説 明

津山市上横野に伝わる手漉和紙は、現在では横野和紙と呼ばれている。上横野における<sup>みつ</sup>三極紙の製造は、明治時代中頃に津山の実業家である<sup>あさくらおのきち</sup>浅倉斧吉が、三極の成育に適した自然条件と良質な水を見つけて上横野地区の人びとに生産を勧めたことが発端である。三極の刈り取りから<sup>じんびせんい</sup>靱皮繊維の取り出し、紙料とするための裁断、流し漉き、板干しという工程で作られる三極紙は、薄く、かさばらず、わずかな凹凸を持ちながらも表面が滑らかで金箔を傷つけることがないため、金箔を挟む箔合紙としての需要は大きく、我が国の伝統産業にとって重要である。

<sup>うえだしげお</sup>上田繁男氏は、三極紙製造の伝統技術を踏襲して和紙を製作している。氏は、文化年間（1804から1818年）に津山藩の御用紙を漉くことを拜命して以来、200年以上にわたり手漉和紙の技術を継承する上田家の6代目として岡山県津山市に生まれた。父の5代上田

菊治に師事して昭和33（1958）年、16歳で手漉和紙の全工程を習得している。三極紙以外にも様々な楮和紙も漉く等、製作の幅は広く、平成17（2005）年には津山工芸展津山市文化協会理事長賞受賞、令和元（2019）年には第77回山陽新聞奨励賞（文化部門）を受賞している。全国手すき和紙連合会会員として弟子・後継者育成に力を尽くしながらも、地元小学校の児童に手漉和紙の指導を行う等、手漉和紙技術の継承・普及にも積極的に取り組んでいる。

## 【 9 】

- |   |        |                      |
|---|--------|----------------------|
| 1 | 種 別    | 重要有形民俗文化財            |
| 2 | 名称及び員数 | 備前焼の製作道具 1, 100点     |
| 3 | 所 在 地  | 備前市伊部 備前市埋蔵文化財管理センター |
| 4 | 所 有 者  | 備前市                  |
| 5 | 説 明    |                      |

備前焼は、岡山県備前地域で生産が開始され、当地において現代まで生産されている釉薬を使用せずに焼き締められた陶器である。備前焼の製作は採土、成形、窯詰め、焼成、窯出しという工程を経て完成に至る。

備前焼の製作道具1, 100点は、備前焼製作の各工程において使用される道具類である。

採土にはスキ（鋤）を使用する。掘り出した原土は乾燥保存し、トウグワ（唐鋤）やツルハシ（鶴嘴）で碎きながら砂、石、草木の根等を除く。さらに、キヅチ（木槌）やウス（臼）、トウス（唐臼）で粉碎してスイソウ（水槽）に入れ浸潤させる。マゼイタ（混ぜ板）やカイ（椀）で攪拌し、沈殿させ水簸する。水簸した泥漿をドベバチ（ドベ鉢）に吸水させた後、ドベダナ（ドベ棚）に並べて水分を取り、粘土にして土室で保管する。

成形にはヘラやコテ等を使用する。回転成形の器を造る時にロクロ（轆轤）を使用し、型成形では土型、木型、石膏型を用いる。甕や壺等は器壁を叩き締める必要があり、タタキを使用する。細工物ではケガキやハリ（針）、アナアケ（穴開け）等で細部の仕上げを行う。

窯詰めの際には、製品を降灰から守るサヤ（匣鉢）に入れたり、大甕に藁を巻いて詰めて平板で蓋をし、蓋の上にも製品を乗せるほか、ツク（支柱）で支えた平板に製品を並べる。窯内部の灰や熾を掻くために用いるデレッキは、用途に応じた形状を呈する。窯焚き後半には窯内に炭入れの作業をする場合があり、柄のついた道具を用いる。

江戸時代以降の備前焼の製作道具が、用途を把握したうえで一括保存されている。備前焼製作の様相を体系立てて把握することができる資料として重要である。

## 追加指定

### 【 1 】

- 1 種 別 重要文化財（古文書）
- 2 名 称 寶福寺文書
- 3 追加される員数 3通
- 4 追加後の員数 13通
- 5 所在地 岡山市北区後樂園 岡山県立博物館保管
- 6 所有者 （宗）寶福寺
- 7 製作年代 延文6（1361）年から慶安元（1648）年
- 8 説 明

井山いやま寶福寺は、臨濟宗東福寺派の寺院である。寺伝にはもと天台宗とあり、鎌倉時代鈍庵どんあん慧聡けいそうのとき、東福寺開山えん に べんえん山田爾弁円ぎよくけい え しゅんに参禅し、弁円の弟子玉溪慧璿ぎよくけい え しゅんを招いて禅宗に改めた。玉溪む むいつせいの法嗣夢無一清の代以後も教線を広げ、山陽地方の臨濟宗東福寺派の拠点として大いに繁栄した。戦国時代に兵火により三重塔を残して伽藍がらんは焼失したが、江戸時代に入り幕府や領主の庇護のもと復興を遂げた。近世禅宗寺院の威容を今に伝えており、平成12（2000）年3月28日に県指定史跡に指定された。

寶福寺所蔵の古文書については、平成23（2011）年3月4日に10通が岡山県指定重要文化財に指定されている。この指定後に、新たに確認された3通の古文書を、今回、追加指定して保護を図るものである。

対象となる3通は、京に上る際の旅費に関する規則「天得庵坊主巡次上洛之時料足定書てんとくあんぼうずめぐりつぎじょうらくのときりょうそくさだめがき」（応安5（1372）年5月24日付）、般若庵の年貢の運用規定「般若庵倉方造宮物規式ほんにやあんくらかたぞうえいぶつきしき」（永享3（1431）年4月8日付）、および毛利氏による検地を記した「備中国井山領検地目録」（天正4（1576）年11月23日付）である。検地目録は「納所注文のうしょちゅうもん」の裏面を使用している。

1	天得庵坊主巡次上洛之時料足定書	応安5(1372)年5月24日	1通	32.1×43.1
2	般若庵倉方造宮物規式	永享3(1431)年4月8日	1通	29.5×81.9
3	備中国井山領検地目録	天正4(1576)年11月23日	1通	31.8×84.2



【指定】

【1】金銅造池田光政坐像 1 軀



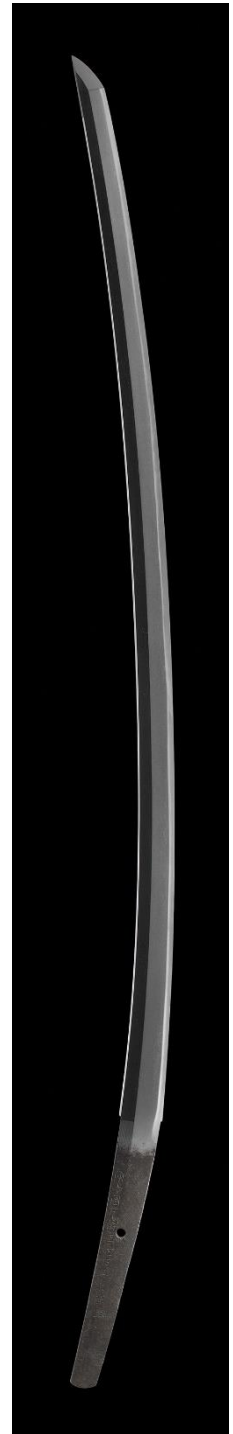
【2】木造菩薩坐像 1 軀



【4】袈裟襴文銅鐸 1 口



【3】太刀 銘備中国万寿庄住左兵衛尉恒次  
元徳二年十月日 1 口  
附  
黒漆塗鞘打刀拵 1 口  
延宝八年本阿弥光常折紙 1 通



【5】久米廃寺出土塑像仏及び塙仏 50 点



【6】紙本著色坤輿万国全図屏風 6曲1隻



【7】コヤスノキ 1株



【8】手漉和紙（三極紙）



【9】備前焼の製作道具 1,100点



【追加指定】

【1】寶福寺文書

3通

